シカゴでの第93回アメリカ医学図書館協会年次大会

山 崎 茂 明*

東京慈恵会医科大学医学情報センター

I. Windy City シカゴ

1993年5月13日、朝の9時過ぎにシカゴのオヘア空港に到着した。気温は7度であり、ジャンパーを着込んで外へ出た。市内へは空港ターミナル4の暗いドームのような地下駅からオヘア・コングレス線に乗る。入口で1ドル50セントを支払い、ターンバーを押して構内に入る。チケットを渡してくれなかったので「May I obtain my ticket?」と尋ねた。これがシカゴでの第一声であった。乗換用のトランスファー以外は、チケットではなく、入口で料金さえ払えば後は好き勝手に出なければよいといったところである。郊外は地上を走り、途中荒れた感じの住宅地も続いていた。電車で揺られながら乾燥した空気の中で澄み切った青空を見ていると、アメリカに来たことを実感する。ディビジョン駅から地下に入り空港から約35分でイリノイ・ステイトセンターのあるクラーク・レイク駅に着き、地下のレストラン広場へ出た。エスカレータで地上へ昇り、方向を確かめ、ステート通りを東へ歩いた。ミシガン通りまで歩き、北へ曲がりホテルを目指す。すれ違う人々や街の様子に注意しながらゆっくりと歩いていった。風の街シカゴ(Windy City)は思っていたよりも清潔感のある街である。シカゴ川(写真1)を渡るとき、ゆったりとしたミシガン湖が眺められた。

第93回アメリカ医学図書館協会(MLA)年次

写真1. ミシガン通りのハネ橋(シカゴ川)

大会は、1993年5月14日から20日にかけてシカゴのPalmer House Hiltonで開催された。ポートランドで開催された6年前の第87回大会から2回目の参加になる。海外での国際会議では、1988年のバーゼルで行われたヨーロッパ科学編集者会議、そして1990年アントワープで開催された第32回国際医学史学会で発表してきた。今回は、19日の午後“Changing the Organizational Culture II: International Issues”と名付けられたセッションで10分間の口頭発表を行った。会議にはゲストで訪問するのではなく、発表者になることで参加意識を強く持つことができる。プログラムの内容は、今後を展望する医学図書館界のリーダーによる講演発表、情報交換を目的としたポスターセッション、実践的な内容に富むコンカレント・セッションなど、医学情報サービスの生き生きとした活動に触れることができる。また、新しい技術動向やニューメディアの応用を示している展示は、

* Shigeaki YAMAZAKI : 〒105 東京都港区西新橋3-25-8.

(1993年7月2日 受理)

新しいサービスやシステムを考えている図書館員にとり、役立つ場を提供している。1日コースを基本としたCEコースは、さまざまなトピックスを取り上げており、新しい情報環境に自らを適合させていくための努力がなされている。MLA大会は、学術発表や実践報告を中心とした scientific meeting だけでなく、会員が一堂に会することで行われるさまざまな business meeting, 友人と再会し新しい知人を得られる大小のパーティー、そして展示や転職斡旋サービスまで、実に豊富な内容を持っている。参加者は2,000名を越えており、人間が集うことで生み出される活気は、不思議な魅力があるものだ。

II. ノースウェスタン大学医学校

MLA大会に先立ち、5月14日ホテルから歩いて3分の Galter 保健科学図書館を訪問した。シカゴへの訪問目的のひとつに、最近の医学図書館活動の状況をサービス現場を通して感じとり、今後の方向性などを責任ある人から聴いてみたかった。図書館の現場を訪問し話をすれば、かなりの事柄を理解できるものだ。シカゴには、現在多くの医学校が存在しており、19世紀の中ごろに中西部に発生した小規模な数多くの医学校の統合と消滅の歴史を背景に持っている。ノースウェスタン大学医学校は、1859年にRush医学校からわかれたグループが、Lind 大学のもとで医学部を創設し、1863年になり Chicago Medical College と名称を変更し、さらに1870年になり現在のノースウェスタン大学と連携するようになった(写真2)。この医学校の創設者である Nathan Smith Davis は、アメリカ医師会の設立に大きな役割を果たし、1883年に創刊されたJAMAの初代編集委員長を高齢にもかかわらず務め、医学教育の改良家として名声を勝ち得た人である。おそらく、この医学校には偉大な医学教育者である

写真2. ノースウェスタン大学医学校

Davis の影響が流れているはずである。シカゴの医学図書館への introduction を得るためにも、また個人的に資料を収集したいと考えていたアメリカ医学ジャーナリズムと Davis 関連文献の入手にあたり、助言を得ることができるだろう。

副館長の Faith Ross さんと約束していた午前10時に会い、訪問目的を説明した後で、彼女から新図書館のプラン、PBL (Problem Based Learning) や Medical Informatics の医学教育に果たす医学図書館側の役割、MLA大会のポスターセッションで発表する“Aldus Persuasion in case-based learning”などとても興味深い話を聞いた。新図書館の計画には、教育への強い関心が反映されており、PBLの教育を行うための多くの小さな学習室が館内に配置されていた。現在の Learning Resources Center は拡大され、教育のためのシラバスデータベースから電子解剖図譜までさまざまな情報源を提供しようとしていた。シラバスデータベースを日本で実行しようすると、さまざまなパソコン、ワープロ、ソフトを統合するか一歩化する努力が必要だが、最大の問題は教員が自分の講義ノートをきちんとまとめそれを公開することに協力できるかにある。医学生に人気のある電子メディアのひとつに「Directory of residency training programs accredi-

ed by Accreditation Council for Graduate Medical Education. (AMA)」があり印刷体よりもカレントな情報をより詳細に知ることができるといった。日本にも「臨床研修病院ガイドブック」が存在し学生に人気があり、データベースとして将来日本でも提供されると良いと思った。Medical Informatics の講義と実習を行う専用の教室はすでに完成していた。医学部の教員と協力して、図書館側でも医学情報資源や文献検索について講義と実習を担当している。アメリカの医学図書館を見て感じることは、新しい理念や技術が常に実際の応用例として提示されることだ。日本では、理念が理念のまま論議され実践的な応用まで多くの時間を要してしまう。

個人的な収穫もあった。Davis の著作である“History of Medical Education and Institutions in the United States” (Chicago, 1851) の所蔵を確認でき、歴史コレクション室にあったこの本の全文をコピーすることができた。1910年に発表された Flexner レポートは、アメリカの医学教育史上有名であるが、1851年の本書も重要な資料だと思っている。

Ⅲ. Newberry 図書館

シカゴ医学の歴史書によれば、Davis を中心に1889年に医学図書館をつくるために協会が設立されたが、十分な資金と蔵書を集めることができなかったようだ。そこで、すでに1887年に創設されていた Newberry 図書館との話し合いで、医学部門をつくり、協会はそれまでの蔵書を寄贈し、またシカゴ医師会もシカゴ公共図書館にあった医学書をNewberryへ移すようにした。つまり、シカゴ医師会の医学図書館としての機能を果たしていた時期があった。Davis や医学ジャーナリズムに関する資料が発見できるかもしれない。ミシガン通りを北に歩き、アルトン通りを西へ3ブロッ

クほどいくと、公園を前に重厚な建物が見えてくる。現在の Newberry 図書館は、公共図書館ではなく人文科学分野の歴史研究図書館であり、蔵書数は150万冊である。

カウンターで一日利用カードを作ってもらい、レファレンスライブラリアンから目録の利用法などの概略を教えてもらう。まず Chicago Medical Journal の所蔵と Davis の資料を探した。1980年以降の受け入れ分はオンライン目録が作成されていた。カード目録から、Davis が“Free medical school”を提唱した講演記録が、4階の貴重書室に保管されていることがわかった。19世紀後半のアメリカの医学教育は金儲け主義に陥っており、彼は無料の医学校という考えを提示することで当時の悪しき風潮を批判したものである。医学教育システムの改良家としての Davis の姿勢を示した講演といえる。序文には、アメリカ医学教育の父といわれている Morgan, 19世紀前半の中心人物である Rush などの、先人の言葉が記載されていた。Premedical 教育の充実を主張している Davis にとり、Morgan と考え方が一致している。東部フィラデルフィアにもたらされたエジンバラの高い医学教育の理念が Davis にまで流れていることを知った。シカゴや Davis, そして彼の創刊した JAMA が、見近な存在に感じられるようになった。コピーは、資料の保存状況が良かったので許可してもらった。また、“Union List of Serials” 3版によれば、Chicago Medical Journal は、シカゴ地区では Rush 医科大学が完全に所蔵していた。

Ⅳ. MLA大会のスタート

16日の日曜日、会場の Palmer House の6階で登録をし、早速マグカップやTシャツの並ぶ記念品グッズの売り場へいった。XLは大きすぎるだろうかと、売り場にいた人に何気なく話しかけ

た。今回のシカゴのTシャツは人気がありそうだとのことだ。私も気に入り白地と紫地の2種類のものを購入した。応対してくれた方のネームタグを見ると Erich Meyerhoff と書かれていた。前コーネル大学医学図書館館長であり、かつて Janet Doe 記念講演をされ、スナイダー純子さんの先生でもある人であった。後で、自己紹介と挨拶をして、19日の朝食と一緒にコンGRESホテルで食べた。そこで、私たちの共通の友人である純子さんへ葉書を書いたりした。現役で仕事をされている時に会えたらという思いが少しよぎった。それにしても、記念品売り場に Meyerhoff さん自身が、ボランティアで協力していたことには少々驚かされた。しかし、誰もが平等に自分のできる範囲でMLA大会に協力し参加しているということであろう。

開会式と、それに続く特別講演, International visitors のパーティー, そして歓迎パーティーというプログラムが始まった。特別講演は「Megatrends for the Information Age」と題したものであった。講演は情報を伝えることよりも、志しを伝達するものであり、実際の仕事や研究に裏打ちされたものでないと、聴衆に訴えないのではないだろうか。今回の特別講演は情勢論を中心としたものであり、私は南北戦争以前のアメリカで、ポピュラーメディアや娯楽の少ない時代に繁盛した講演業のエピソードを思い出した。

5時から International Member's Reception が始まった。会場には人が一杯である。白ワインをもらって混雑したなかへ入る。ジェファーソン医科大学の Edward Tawyea 館長がおり、シカゴでの再会を喜び合った。私たちは、19日の午後同じセッションで続いて発表することになっていた。フィラデルフィアでの滞在の時は、いつも食事をしたり話しをした間柄であった。エドは、ノースウェ스턴の副館長からジェファーソンへ転じており、MLAのシカゴ大会へは参加する

だろうと考えていた。現在のノースウェ스턴の副館長 Faith さんが、彼の後任者であることや、University Librarian という名称から Biomedical Communication Center を含めたより広い責任を持つ Director of Academic Information Services and Research になり、ストレスが多いとこぼしていた。ジェファーソンからは、シカゴで合計3件の発表がなされており、活発さを印象づけていた。イリノイのウィリアムスみつ子さんとも話した。日本医学図書館協会の変化に注目しておられ、日本から積極的にニュースをアメリカに知らせるよう助言された。

6時からの歓迎パーティーは展示会のオープニングを兼ねたものであった。歓迎パーティーは、いつもチーズとワインを中心にした軽いものであり、ここで友人や仲間を見つけ本格的なディナーへいくことになる。興味あるブースを見つけては、説明を受けたりパンフレットを集めたりした。ワシントンのジョージタウン大学が開発したL I S システムの展示ブースにいくと、現在の Bulletin の編集委員長である Naomi Broering さんがおられた。突然ではあったが、自己紹介をし自分が日本の「医学図書館」の編集委員長であることを告げた。彼女は少し驚かれた様子であったが、にこやかに応じてくれた。そして、日米の編集委員長がシカゴで出会ったことを記念して写真を取り、

写真3. Broering 編集委員長とともに

握手をして別れた(写真3)。論文を通して思っていたより静かな感じの人であった。偶然の出会いであったが、とても楽しかった。

V. MLA大会の概要

17日、8時30分から Concurrent Tracks が始まった。“Human Factors in the Virtual Library”と題されたテーマのもとで、シンシナティの Lorenzi 博士が最初の発表を行った。“It’s a High-Wire Act”という演題で、技術環境の急激な変化のなかで医学図書館員はどのように生きていったらよいのか、といった内容であった。社会へのコンピュータの普及、パソコンチップの低廉化により、図書館全体を電子変換する技術環境がもたらされてきた。情報技術は高度化され (high tech), それだけにユーザーに使いやすい (high touch) 工夫が大切である。このような環境のなかで、図書館員は情報カウンセラー (information counselor) と呼ばれ、human information filter としての役割を担うことになる。また電子化された図書館 (virtual library) をどのようにしたら実現できるかは、さまざまな専門家と協力関係をつくりあげられるかにある。技術環境と人間とのバランス、そして専門家間の協調を重視した Lorenzi さんの講演であり、最後のほうにルイス・キャロルの引用もあった。「Would you tell me, please, which way I ought to go from here? That depends a good deal on where you want to get to.」という言葉で、私自身好きな言葉であった。

午後は、Concurrent Session に参加し、発表の形式や会場の雰囲気を見えることにした。肩のこらないフレンドリーな雰囲気、モデレーターと発表者はお互いにファースト・ネームで呼び合いながら進行させていた。また OHP の使用時には他の演者が手伝ったりしての発表である。セッ

ションをチェアーするモデレーターにもよるだろうが、学会発表の堅さはなく、みんなで知らせあい討議しようという感じである。発表時間は大幅な超過でない限り許されており、厳しい時間管理はなされていない。このようなゆとりある運営は、とても参考になった。聴衆と演者は、大会発表のルールについて基本的な理解を共有しており、お互いに意見を述べたり発表したりすることに慣れている。このあたりが、日本との大きな落差だと思う。

ポスター・セッションは、3年前ぐらいから取り入れられた発表形式である。情報交換の場であり、活気がありとてもおもしろかった。発表資料が無くなったポスターには、名刺を置いたり名前を書いておく和日本に資料を郵送してくれる。教育サービスや consumer health information サービスに関する発表が特に目についた。地域の医師や住民への医師会と医学図書館員の協力による情報サービスの展開などが印象的であった。キャンディーやチョコをさりげなく置いてある気配り派から、ぶっきらぼうにマックを一台置いて実演だけしている人、そしてフォーマルなすてきな服で決めている人もおり、参加者を飽きさせない。MLA大会は、研究者のための学会ではなく、医学図書館員の教育と情報交換を目的にしたもので、

写真4. Friends of National Library of Medicine
主催パーティーで(館田鶴子さん撮影)

発表内容も実践報告が中心である。今回は、自分自身発表する側になり、他のセッションへの参加が十分にできなかったが、会議の雰囲気は十分感じることができた（写真4）。

発表のあった19日は、午前中はホテルで練習を繰り返した。できるだけ大きな声でゆっくりしゃべるように心がけた。この日、コンgressホテルで Meyerhoff 前館長と朝食を食べた際、疑問に思っていた単語の発音をなおしてもらった。辞書の発音記号とは少し異なっており、確認してよかった。同時並行でいくつかの会場で発表がなされる Concurrent セッションのため、私たちのテーマへの参加者は少なかった。モデレーターは、ピッツバーグ大学図書館情報学科の Ellen G. Detlefsen 助教授であった。彼女とは、一年前に日本で会っており、今回の発表演題に対する審査委員の一人であった。南北戦争以前の南部出版史で博士学位をとっており、Medical Informatics という研究分野とともに歴史への関心を持っている人である。図書館情報大学の野添篤毅教授と親交があり、オンタリオ通りの日本料理店で、Ellen さん、野

添さん、館さん、六本木さんたちと夕食をともにした。友人であるジェファースンのエドも一緒にセッションであり、いくらか緊張はしていたが不安はなかった。仲間のなかで話しているといった感じであり、英語ということを別にすれば日本にいるのと違いはない。

大会終了後、アメリカ医師会図書館とシカゴ大学 John Crerar 図書館を訪問し、アメリカ医学ジャーナリズムに関する多くの文献を入手することができた。じっくり読むことのできる時間をいっとれるかわからないが、ファイルケースにしまっている。それにしても、短時間に求める文献を探し出し入手することに関して、アメリカの図書館の使いやすさと図書館員のホスピタリティーには感心させられる。日本からの参加者は少なかったが、夕方になると自然と集まり食事にいった。大会終了後シカゴに残っていた野添教授と二人で、3軒もはしごをしてしまった。フィラデルフィアやボストンと並び、シカゴはアメリカを代表する医学都市である。機会があれば、また訪れたいと思っている。